

お薬のしおり

インフルエンザ菌b型 (Hib) วัคซีนについて No.85 (H20.11)

東京医科大学病院 薬剤部

みなさんは、インフルエンザウイルスとインフルエンザ菌とは全く別のものだという事を知っていますか？

一般的に「インフルエンザ」と言えばインフルエンザウイルスによって急に38以上の発熱を伴って起こる感染症かんせんしょうのことを意味します。それでは何故インフルエンザ菌などと紛らわしい名前がついている菌があるのでしょうか？

インフルエンザ菌とはグラム陰性桿菌であるヘモフィルスインフルエンザで、19世紀末にインフルエンザの患者さんから分離され、インフルエンザの病原菌と間違われてしまったからです。その後、インフルエンザの病原体はウイルスであることが判明しましたが、本菌が呼吸器やそれらに連結した部位での感染を引き起こすので、菌名として残されました。今回はそのインフルエンザ菌について述べてみたいと思います。

『細菌性髄膜炎』という病気を、耳にしたことがありますか？細菌性髄膜炎さいきんせいずいまくえんとは脳せきずいと脊髄おおを覆っている膜ずいまく（髄膜）に起こる感染症のことです。細菌性髄膜炎さいきんせいずいまくえんの原因菌としては、数種類の細菌があげられますが、年齢によって原因となる菌が異なるという特徴をもっています。たとえば、3ヶ月～6歳までの乳幼児における髄膜炎ではインフルエンザ桿菌と肺炎球菌が原因となることが多く、成人においては肺炎球菌とブドウ球菌が多いという傾向があります。症状としては通常、数日間熱が高くなり、頭痛、錯乱、首のこわばりなどがみられます。一部の乳児、特に生後3～4カ月の乳児では、急速に具合が悪くなって24時間以内に健康な状態から瀕死ひんしの状態にまで悪化する場合があります。また、てんかん、



難聴^{なんちょう}、発育障害^{はついくしょうがい}のような後遺症^{こういしょう}が残ることがあるので注意が必要な病気です。

では、細菌性髄膜炎^{さいきんせいずいまくえん}を予防する方法はあるのでしょうか？海外では小児の細菌性髄膜炎の予防として『インフルエンザ菌 b 型ワクチン(Hib ワクチン)』というものが使用されています。すでに導入されている米国では5歳未満人口10万人あたり年間25人といわれたHib髄膜炎発症数が、ワクチンの導入によりほぼゼロになり、その予防効果が確認されています。

このワクチンですが、日本では今まで使用できませんでしたが、今年の12月から発売されることとなり、有料で接種する任意接種ワクチンとして導入されます。将来、わが国でもHibワクチンが細菌性髄膜炎^{さいきんせいずいまくえん}の予防に有効であることが証明され、定期接種に組み込まれることが期待されます。

接種スケジュールは、初回の接種を始めた年齢により異なり、年齢が大きくなるにつれて、接種回数が減ります。具体的には、6ヶ月未満で開始すると3回+1回（1年後）の合計4回、6ヶ月～1歳未満で開始すると2回+1回（1年後）の合計3回、1歳以上で開始すると1回のみ接種となっています。

最後に、こんなに発売が待ち望まれているHibワクチンですが、12月下旬の発売以降も全国的に供給量が限られています。各医療機関で入手困難な状態が続きますので現段階での接種は、残念ながら難しいと思われます。

